研究活動

山　脇　雅　夫

著書，学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
（著書）						
（学術論文） 1．ヘーゲル『精神の現象学』における概念的自己の生成と展開	単著	1990．3	京都大学修士論文	ヘーゲルが哲学の原理とした「概念」の立場が『精神の現象学』においてどのように生成してくるかを論じた。ヘーゲルは彼のいう「精神」の構造を「我々である我、我である我々」という形で定式化する。ここには、対話において典型的に示される、他を介した自己知が表現されている。近代市民社会において実現された個人と個人との相互依存的システムが土台となり、それを思想的に把握することで「概念知」が生成することを論じた。		
2．反省と判断――ヘーゲル『大論理学』についての一試論	単著	1992．9	『哲学論叢』　19号 京都大学哲学論叢刊行会編	ヘーゲルが『論理の学』「本質論」のなかで考察している「反省」が、同じく『論理の学』「概念論」における「判断」の中でも働いていることを手がかりに、反省を特徴づける否定概念を分析した。ヘーゲル論理学において「この花はバラである」といった判断は個別的存在と普遍的存在とが結合した事物の構造を示すものであり、「反省」はこの結合において働く否定的関係付けの論理に他ならないことを示した。		25-36頁
3．ヘーゲル論理学における科学的知識の成立――神の存在論的証明の一側面	単著	1994．7	『アルケー』　2号 関西哲学会年報	ヘーゲルが『論理の学』「概念論」で、「神の存在論的証明」の論理構造を解明したとしている箇所を分析した。そこで「形式」という概念と「内容」という概念が重要な役割を演じることに注目くし、『論理の学』でのそれらに対する定義をもとに、ここで問題になっていることが、学的知識にそなわる必然性からその実在性を導くものであることを解明した。それが自然学的知識の基礎付けとなっていることを明らかにした。		126-136頁
4．仮象と反省――ヘーゲルの矛盾概念の理解のために	単著	1995．3	『近世哲学研究』1号 京大・西洋近世哲学史懇話会編	『論理の学』「本質論」冒頭箇所を注釈した。反省が普遍と個別との間の運動を示すものであることを中心に、普遍的本質の不在を示すものである「仮象」もまた、まさにこの不在ということにとよって本質との関係を示すものであること、また、反省の運動から存在を導くヘーゲルの意図が、普遍と個別との関係が存在論的一次性を有するものであることを主張するものであることを指摘した。		68-89頁

5．学の論理――ヘーゲル『論理の学』研究序説	単著	1995. 6	『密教文化』191号 密教研究会編	「存在論」、「本質論」、「概念論」という『論理の学』の体系構成がもつ学問論的意味を考察した。『論理の学』第一巻「存在論」は基本的に直接的存在を表現する思惟規定を叙述し、第二巻「本質論」は存在を解して認識される内的な本質を対象とするが、両社の統一としての「概念論」は、学的知の構造を、直接的データと普遍的記述の総合として示すものであることを解明した。		109-127頁
6．存在と学――ヘーゲル『論理の学』研究序説	単著	1996. 3	京都大学博士論文	ヘーゲルが『論理の学』の中で示した独自の存在概念を第二巻「本質論」を中心に考察した。直接的存在は、生々流転を繰り返す捉えどころのないものであり、他方、現象への適用を欠いた普遍的記述は空理空論に留まる恐れがある。両者が統一的に把握されて初めて、実在性を持った学知となるのであり、そうした学知に捉えられるものこそが存在である。「本質論」は学知の生成の過程を叙述していることを解明した。		
7．有限な事物の本性としての矛盾――ヘーゲル『論理の学』「反省規定論」注解	単著	1996. 8	『ヘーゲル論理学研究』２号 ヘーゲル〈論理学〉研究会編	『論理の学』第二巻「本質論」の「反省規定論」を注釈した。ヘーゲルは、「この花はバラである」といった判断が実在の構造を示すものであるとし、主語を述語に包摂する思惟の働きを反省と呼んだ。「同一性」、「区別」、「矛盾」といった反省規定は、そうした反省の働き方を示すものであり、判断の主語となる個別的存在者が、同一であり、他から区別され、矛盾するものとして反省されることを示すものであることを明らかにした。		33-58頁
8．ヘーゲルとヴェーバー――近代の運命をめぐって	単著	1997.12	『理想』660号 理想社	ヘーゲルとヴェーバーが、ともに近代文化という問題と対峙していたことを明らかにした。ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と、ヘーゲルの『精神の現象学』を中心に、両者の近代文化に対する認識が多くの共通点を持つことを確認した。しかしヴェーバーが近代の分裂を運命として引き受けるのに対し、ヘーゲルは発話・聞き取りの運動の中に、分裂の中での共同の可能性を見ていたことを指摘した。		72-82頁
9．ヘーゲルにおける存在と無との同一性のテーゼ	単著	1998. 8	『密教と諸文化の交流』 永田文昌堂 著作者名は多数につき省略	『論理の学』第一巻「存在論」冒頭の存在と無の同一性のテーゼを分析した。『論理の学』冒頭の「存在」は第二巻「本質論」冒頭の「反省」の一局面を、「反省」は第三巻「概念論」の「判断」の一局面を叙述したものである。判断のコプラは主語と述語を区別しつつ関係付けており、否定と肯定とがともに含まれる。存在と無の同一性は、こうしたコプラの示す関係主義的存在性を表現していることを解明した。		185-200頁

10. 近代の存在論――ヘーゲルの現実性概念	単著	1998.10	『哲学研究』566号 京都哲学会編	『論理の学』第二巻「本質論」の「現実性」という章で扱われた存在の構造を考察した。「現実性」の章は、その最後のカテゴリーである「相互作用」において、自立した実体同士の間の相互承認的存在構造を描き出している。ここでは、近代の分裂文化の中において、分裂を単に絶対的同一に回収してしまうのではなく、分裂を分裂のままで生きることを基礎付ける存在論が構想されていることを主張した。		89-127頁
11. ヘーゲルの根拠論――知と存在との相即	単著	1999.12	『近世哲学研究』 ６号 京大・西洋近世哲学史懇話会編	『論理の学』第二巻「本質論」の「根拠」の章の分析した。根拠づけるという知の働きは、根拠と根拠づけられるものとを区別・関係させることで事柄を把握するが、落体の法則のような普遍的な法則をを石の落下のような個々の事象に関係付けるためには、初期速度や石の高さといったさまざまな個別的条件があげられる必要があり、普遍的根拠の根拠付けの働きは、個別的条件に支えられていることを解明した。		28-48頁
12.「促し」とはどういう行為か？――初期フィヒテの間主観性の理論	単著	2000.12	『フィヒテ研究』 ８号 日本フィヒテ協会編	初期フィヒテの間主観性の理論の中核をなす概念である。「促し」を、『自然法論』ならびに『新方法による知識学』を中心に分析した。そこでフィヒテは、問いを受けた者が必然的に答えざるを得ないように（答えないこと自体が一つの答え）、促しを受けた者は必然的に自発的行為をせざるを得ないことを語る。促しを受けること自体が能動的なものであり、そこでは能動と受動が統一されていることを解明した。		98-115頁
13. 知の自己吟味――『精神の現象学』緒論における知と即自の区別について	単著	2001. 3	『近世哲学研究』 ７号 京大･西洋近世哲学史懇話会編	『精神の現象学』「緒論」に登場する「知」と「即自」の区別を考察した。「意識は或るものに関係すると同時に、この或るものを自分から区別する」という事態において、関係の側面が「知」と呼ばれ、区別の側面が「即自」と呼ばれる。この論文では、この事態が指しているのは、意識が自分の主観的な意識内容が客観的にも妥当していると主張するという事態であることを解明した。		71-88頁
14.歩く人――遍路の哲学への序説	単著	2004.3	『遍路学』　高野山大学刊行	四国遍路について、哲学的考察を試みた。ハイデガーの技術論を手がかりに現代の技術文明の特質を考察し、その中で失われつつある根源的な自然や存在そのものとのつながりを、遍路がどのようにして回復するかを論じた。「我」意識が肥大化した現代人は、ひたすらに歩くという身体的行為によって我を無とし、そうすることで、世界を受け入れ、また世界に受け入れられる。そうした可能性を遍路に認めた。		263-267頁

15. 聖なるものの言語化――ハーバーマスのデュルケーム論―	単著	2005. 2	『高野山大学論叢』４０巻	道徳の基礎が宗教から合意へと移行するとするハーバーマスの所説を、彼のデュルケーム論を中心に検討した。その結果、ハーバーマスの言うようにデュルケームにおいてある種のコミュニケーション論的転回が生じていることは認められるものの、デュルケームが宗教のうちに見出した生の高揚に代わるものをハーバーマスは提示できておらず、道徳の基礎である価値はやはり聖性を帯びるのではないかという結論に到った。		25-47頁
16. 対話としての吟味――『精神の現象学』における「外」の問題	単著	2006. 9	『哲学論叢』33号 京都大学哲学論叢刊行会編	『精神の現象学』「緒論」に登場する「意識との関係の外」が何を意味するのを考察した。まず研究史を概観し、知の外にあって知を基礎付けるパラダイムを指すという説、知によってテーマ化されたものの「地平」を成すという説などを批判した。その上で、『現象学』の方法である知の自己吟味の持つ対話的構造に着目し、現象知が行う真理主張が「他者」に向けられたものであり、「外」とはこの他者のことであると主張した。		1-13頁
17. 教育哲学の基礎としてのフィヒテの像の理論　その1	単著	2008. 3	『高野山大学論叢』４３巻	教育哲学としてフィヒテの知識学を捕らえなおすための予備的考察をした。チューリヒ講義の最後を締めくくる『人間の尊厳』の中で、フィヒテは人類史的課題に参画することによる人格形成を語る。そこに教育哲学的モティーフを読み取り、像の理論をその基礎をなすものとして解釈しようとした。本論では、その前提として、知識学の原理の成立過程を跡付けた。		31-46頁
18. 啓示宗教と絶対知――『精神の現象学』における時間の問題	単著	2008. 12	『ヘーゲル哲学研究』１４号　日本ヘーゲル学会編	『精神の現象学』「絶対知」における「記憶・内化」の意味を探るべく、絶対知を直接に準備する段階である「啓示宗教」を分析し、それに基づいて「絶対知」の構造を考察した。啓示宗教は過ぎ去った神を記憶において内化・現在化する宗教である。同様に絶対知は『現象学』の道程において過ぎ去った知の諸形態を記憶において内化するところに成り立つ。本論は「絶対知」は『現象学』の全体をその内容としてもつ知であると主張した。		113-124頁
19. デューイ教育論における経験の意味	単著	2009. 2	『高野山大学論叢』４４巻	デューイの相互作用概念に教育の抱えるジレンマを解消するヒントがあることを明らかにした。教育には、社会の文化的再生産という類的課題と、一人の人間の成長を援助するという実存的課題がある。この二つの課題は時に齟齬をきたす。だが、デューイは、相互作用を経験の根本とすることで、個人が自分の人生を全うすることと社会性が矛盾しないことを示した。そのことをデューイの教育哲学的著作を中心に		1-12頁

20. ヘーゲルの教育観――ルソーとの比較を中心に	単著	2009. 2.	『高野山大学大学院紀要』１１号	ヘーゲルもルソーも、特定の文化の形態や狭い社会の枠に限定されない普遍的主体へと自己を形成することを近代人の課題と見た。しかし、人間に内在する本源的自然の導きにおいてそうした主体を形成しようとしたルソーと異なり、ヘーゲルは歴史の総体が普遍的自己に到る道である。歴史を通して歴史を超越した知を獲得することが、ヘーゲル見た近代人の自己形成である。		1-4頁
21. 演劇的知識論の基礎付け――『精神の現象学』「緒論」における知の構造	単著	2009. 12	『ヘーゲル哲学研究』１５号　日本ヘーゲル学会編	『精神の現象学』の方法的特徴は、さまざまな知の立場がそれ自身の主張に沿った形で再構成されることにある。こうした方法は、近代認識論の根本前提である、主観・意識内容・客観の三項図式を打ち破るものである。「緒論」における知の規定は、この方法を基礎付けるものである。それは、虚偽の可能性を含んだものとしての自らの信念を客観的に主張するという、他者の観点を踏まえた知のあり方を叙述しているのである。		96-105頁
22. 人間の尊厳と苦――日本的尊厳の概念を求めて	単著	2010. 6	下西忠他編『仏教と差別』明石書店	人権の基礎を人間の尊厳に見定め、日本文化の伝統において、人間の尊厳がどのような感情の対象となるのかを考察した。シラーにおいて尊厳は崇高の感情との連関において捉えられ、人間を圧倒する自然力に対して意志が示す抵抗において崇高さ感じられるのに対し、日本では、苦のような抗い難いものを受け入れていくところに崇高さが感じられてきたことを、正岡子規や谷川俊太郎の作品を題材に考察した。		139-157頁
（その他） １．Ｌ．ジープ『ドイツ観念論における実践哲学』〈上妻精監訳〉		1995. 11	第３論文担当	翻訳		
２．最近の論理学研究論文批評―ホーゲマン、ラマイル２論文について		1996. 7	『ヘーゲル哲学研究』２ ヘーゲル研究会編	論文評		111-118頁
３．書評：久保陽一著『ヘーゲル論理学の基底』（創文社）		2002. 8	『ヘーゲル論理学研究』8号 ヘーゲル〈論理学〉研究会編	書評		159-163頁
4. 文献紹介：Beiser, German Idealism		2011. 12	Prolegomena, 京都大学文学研究科西洋近世哲学史研究室編	文献紹介		30-37頁
5. 書評：山口祐弘『ドイツ観		2011. 12	**『ヘーゲル哲学研究』17号**	合評会記録		178-181頁
〈口頭発表〉 １．絶対知の間主観的構造		1990. 12	現代哲学研究会 第57回研究会	『精神の現象学』における絶対知を「我々である我、我である我々」という構造から解釈した。		
２．ヘーゲル論理学と神の存在論的証明		1994. 10	関西哲学会 第46回研究大会	『大論理学』における「神の存在論的証明」を自然学的知識の成立という観点から解釈した。		
３．促しとはどういう行為か？		1999. 11	日本フィヒテ協会 第１５回大会	初期フィヒテの「促し」を共同行為として解明した。		
4.『精神の現象学』における		2005. 12	日本ヘーゲル学会	『精神の現象学』の緒論における知の		

無知の構造			第２回研究大会	構造を解釈した。		
5.自己中心性と神秘主義		2006.10	宗教倫理学会 第７回学術大会	トゥーゲントハットの所論をもとに、宗教体験の構造を脱自己中心性として解釈した。		
6.『精神現象学』における対話の意味		2008.6	日本ヘーゲル学会 第７回研究大会	クロス討論パネラー		
7.山口祐弘著『ドイツ観念論の思索圏』合評会		2010.12	日本ヘーゲル学会 第12回研究大会	合評会特定質問者		
８．『大論理学』ワークショップ		2011.6.	日本ヘーゲル学会 第13回研究大会	ワークショップパネラー		
9.『精神現象学』ワークショップ		2012.6	日本ヘーゲル学会 第15回研究大会	ワークショップコーディネーター		

学会等および社会における主な活動	山脇雅夫
平成１３年から平成１４年	『ヘーゲル哲学研究』公募論文審査委員
平成１６年	csテレビ「心の時間」
平成16年7月9日	コンソーシアム和歌山「地域で子育て」
平成19年11月30日	高野町共育フォーラム（コーディネーター）
平成20年8月25日	高野山大学夏季セミナー講師
平成20年10月3日	高野山大学「いのちのセミナー」講師
大学行政への係わり（所属委員会）	
平成13年度	学生募集対策委員会（委員長）、学報編集委員会、
平成14年度	学生募集対策委員会（委員長）、学報編集委員会、生涯学習委員会
平成15年度	学生募集対策委員会（委員長）、学報編集委員会、生涯学習委員会
平成16年度	学生募集対策委員会、同和研究会、生涯学習委員会
平成17年度	学科主任、教務委員会、入学試験委員会、生涯学習委員会
	同和研究会、科目等履修生選考会議、スピリチュアルケア
	学科設立準備委員会、120周年記念事業委員
平成18年度	学科主任、教務委員会、入学試験委員会、科目等履修生選考会議、生涯学習委員会、学友会総務本部長、学生部協議会、選挙管理委員会
平成19年度	学科主任、教務委員会、入学試験委員会、科目等履修生選考会議、学友会総務本部長、学生部協議会、選挙管理委員会、就業規則40条審査委員会、学生募集戦略本部、GP課程本部、自己評価点検実施委員会
平成20年度	学科主任、教務委員会、科目等履修生選考会議、就業規則40条審査委員会、学生募集戦略本部、GP課程本部、自己評価点検実施委員会

平成21年度	企画・広報委員会(主幹)、自己評価点検実施委員会、教務員会
平成22年度	企画・広報委員会(主幹)、自己評価点検実施委員会、教務委員会
平成23年度	企画・広報委員会(主幹)、自己評価点検実施委員会、教務委員会

所属　文学部	職名　教授	氏名　山脇雅夫	大学院の授業担当の有無 （　無　）

教育活動

教育上の主な業績	年月日	概　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2003年通年	宗教思想史授業において、前回授業のまとめを穴うめ式プリントを用いて学生にやらせた。
	2011年後期	哲学方法論の授業において、マイケル・サンデル教授の講義ビデオを鑑賞しながら、それをモデルとした双方向的対話型授業を試みた。
2．作成した教科書、教材、参考書	2003年通年	同上のための小プリント
	2004年3月	『遍路学』４章の３担当
	2006年3月	「日本語」テキスト作成
	2007年3月	同上改定
	2008年3月	同上改定
	2009年3月	同上改定
	2010年3月	同上改定
	2012年3月	同上改訂
	2012年6月	日本語授業内で使用する「般若心経」現代語訳プリントの作成
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2009年7月	『高野山教報』7月号授業内容レポート
	2010年1月	『高野山教報』1月号「師を持つことの意味」（乾教授インタビュー）
	2010年7月	『高野山教報』7月号授業内容レポート
4．その他教育活動上特記すべき事項		特になし。